阿仏尼の天神信仰
―『安嘉門院四条五百首』の「えがらの宮の百首」に見る―

福留瑞美

一、はじめに

阿仏尼は、建長五年（一二五三）頃に藤原為家と知り合い、その後、正嘉二年（一二五八）頃に定覚律師、弘長三年（一二六三）に為相、文永二年（一二六五）に為守を産んだ。

為家には既に正妻である宇都宮頼綱女との間に為氏や為教らがいた。しかし、為家は晩年に生まれた為相らを不憫に思ったようであり、阿仏尼や為相（侍従）宛に譲状を何度も記している。また、為氏に既に贈与していた播磨国細川庄などを悔い返して、為相に譲ったということなどもあって、「譲状」(註1)には、

・おほかた融覚が子孫とて候はんものゝ、この事たがへまいらせ候はん時は、京・かまくらへも申て……

（文永五年十一月十九日付）

・もしさたいできたり候は、この状をもちて公家にも武家にも申ひらかるべく候。

（文永十年七月廿四日付）

とあるように、為家は自分の死後に訴訟が起きることを予期していたようであり、訴訟が起きた場合に「公家にも武家にも申ひら」くよう、阿仏尼に命じている。

建治元年（一二七五）に為家が亡くなると、まもなく為氏との間で細川庄をめぐって訴訟が起き、公家に申しひらいていたようであるが京都では決着を見ず、阿仏尼は六十歳前後という年齢にもかかわらず、弘安二年（一二七九）十月に「武家にも申ひら」くため単身鎌倉へ下向したのである。

以上の状況のもと、弘安二年から四年にかけ、鎌倉滞在中に関東

の各社へ奉納した百首を集めたものが『安嘉門院四条五百首』[注2]（以下『五百首』と記す）である。

『五百首』は、残闕部分[注3]と今熊野・荏柄宮・新賀茂社・新日吉社・鹿島社の各社に奉納した百首からなる全五〇六首である。

本稿では、その中の荏柄宮に奉納したという百首に注目したいと思う。まず、荏柄宮百首が、どういった過程で詠まれたかということを知るためにも、荏柄宮百首の序文と跋文をみていく。

序文には、

　かくて、むつのみやしろにはつゐでにしたがひてしだいによみてたてまつりつ。いまはさのみやはとてすぐすほどに、おなじ三年さ月のすゑつかた、ある人「この国にも北野の天神をうつしたてまつりてえがらといふやしろおはします。うたよみてたてまつれかし」といふ。京にても北野へは百首よみてたてまつりしかど、このさかひにてもおなじくはことさらよみてたてまつらん。さしもいつはりもおほきよなればとおもひて、又はじむ。

跋文には、

　弘安三年六月七日、えがらの宮へまいらせつ。よみはじむる事は同五月廿五日の夕方より也。其後日ついでまつほど、又しだいによみかへたる歌どもゝあり。

とある。

本来『五百首』は十社百首の形態であったため、荏柄宮百首の前には既に「むつのみやしろ」に奉納されており、荏柄宮百首は七番目に詠まれたものになる。跋文にあるように、この百首は、弘安三年五月二十五日（天神の縁日）から詠みはじめられ、六月七日に奉納されたものである。序文からも荏柄宮が北野天神を勧進したものであることがわかる。また、荏柄宮とは、鶴岡八幡宮の西にある荏柄天神社のことを指していると思われる。

序文には、京の北野に百首を奉納したとあるが、おそらくこれは、今回の訴訟に関する祈願と考えられ、一二七五年（為家の死後）から一二七九年（鎌倉下向前）の間に奉納したものと思われる。それにもかかわらず、天神に対して「ことさらよみたてまつらん」とあり、他でもない天神だからこそ、もう一度奉納するのだということを主張している。『五百首』の他の四社の序文には、荏柄宮百首のように、この神だからこそ奉納するのだという強い意志がうかがえるものはない。それでは、なぜ阿仏尼はそこまで天神に拘っているのだろうか。なぜ天神でなければならないのであろうか。現在では専ら「学問の神様」という天神信仰であるが、以下では、阿仏尼にとっての天神信仰はどういったものであったのかという観点から考察していこうと思うのである。

二、歌枕

奉納百首の性格として、神社に関する歌枕、または神社の所在地に関係の深い歌材を詠み入れるという制約になっているので、まず荏柄宮百首における歌枕について見ていくことにする。

188 ことはりのいちはやかりしひとよ松いまもきたのゝ昔忘るな

（「松」）

この和歌は「北野」と「来た」の掛詞になっており、「昔」というのは、序文に「京にても北野へは百首よみてたてまつり」と示していた「北野社百首」の時のことを指しているのではないだろうか。その時の願い、つまり二条家との訴訟に勝訴することを願い、早く叶えてほしいと詠んだものと思われる。

天慶五年七月十二日、京都七条坊に住む多治比の女あやこという者に、北野に神殿を造るようにとの託宣があり、また天暦九年に老松・富部という二人の従者と共に現れた天神が、近江国比良宮の社人に託宣して「二人の従者ははなはだ不調のものどもぞ。心ゆるしなせそ。わがゐたる左右にをいたれ。老松は我に随て久なりたるもの也。われむかし大臣たりしとき、夢のうちに、松身に生いて、すなはちおれぬとみえしは、流さるべき相なり。松はわがかたちのもの也」などと子細を相議する間に、一夜にして北野に松が数千本生え数歩の林となったので、ここに宮を建て、菅神を勧進したという伝説が『北野天神縁起』[註4]にある。あるいは、北野社ができてから社頭に一時にして松林が生えたという伝説もある。188の和歌は、このような伝説をふまえたと思われる「北野の一夜松」という歌語を詠んでいるのである。

また、『為家七社百首』[註5]（北野社百首）五七四「松」には、

・たのむかないまもきたのの一夜まつむかしのあとにいろもかはらず

とあり、188の和歌は、この為家の和歌を本歌としていると思われる。

この荏柄宮百首の中で、北野に関する歌枕を詠んでいる和歌は、この188の一例だけである。荏柄宮百首の中の歌枕（地名）[註6]は十三例ほど確認できるが、そのうち北野に関するのは一例しかなく、『五百首』の他の四社や『為家七社百首』の北野社百首[註7]と比べても、荏柄宮百首は圧倒的に少ない。これは、序文にあるように、一度は京の北野に奉納したということもあって、重なることをおそれたのかもしれない。それにしても奉納百首としては、少なすぎるように感じる。それでは、歌枕以外で北野に関するものはないのだろうか。

三、本歌取り

次に、北野に関係するものに、菅原道真つまり北野天神の和歌を

意識していると思われるものが数例あるということである。

113　こち風の吹をくりける梅の花やへのしほぢの跡もなつかし

（「梅」）

ここでは、『拾遺和歌集』巻第十六・雑春・一〇〇六、

　　ながされ侍りける時、家のむめの花を見侍りて

　　　　贈太政大臣

① こちふかばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春をわするな

という和歌を意識しているものと思われる。113は阿仏尼が鎌倉在住中に詠んだ和歌であるので、「こち風」というと海の方向からということになってしまうが、道真の和歌が示すように、こち風が運ぶ梅の香りというものは京を思い出させるものとして、京や旅路を懐かしんで詠まれたものと思われる。「やへのしほぢの跡」とあるのは、道真が配流の時に海路を渡ったことを想起し、自身の鎌倉下向の旅とを重なり合わせているのではないだろうか。

114　かはみづのにごらぬよをや頼らんくち木の柳かげをはぢても

（「柳」）

この和歌は、年をとって醜くなっている自身を「くち木の柳」とし、水面に映る自分の姿を恥じてまでも（年老いた姿を晒してまでも）、濁らぬ公平な世の中を願うのであろうかと、ためらう気持ちを歌ったものと思われる。ここでは『新古今和歌集』巻第十六・雑歌上・一四四九、

　　柳を　　菅贈太政大臣

② みちのべのくち木の柳春くればあはれ昔と忍ばれぞする

という和歌を意識していると思われる。114の和歌の解釈として、道真（＝天神）は「くち木の柳」を「あはれ」と偲んでおり、「くち木の柳」である年老いた阿仏尼自身をも「あはれ」と心を掛けてくれるのではないかということを願っているものと思われる。

192　神よはやまことあらはせ足曳のこなたかなたの道をたゞして

（「山」）

『新古今和歌集』巻第十八・雑歌下の巻頭には、配所における孤独や絶望などの心情を詠んだ道真の述懐歌十二首（一六九〇〜一七〇一）が連続し載せられている。192では、その巻頭歌にあたる一六九〇、

　　山　　菅贈太政大臣

③ あしびきのこなたかなたにみちはあれど都へいざといふ人ぞなき

という和歌を引いている。

以上の113・114・192の三首が、道真の和歌を踏まえて詠まれた和歌である。

道真という歴史上の人物であった神であるがゆえ、道真が生前詠んだ和歌を本歌にすることは、天神へ奉納する和歌の大きな特徴であるが、これは阿仏尼だけに限った詠法ではない。例えば、『為家七社百首』の北野社百首では、

a　神がきにはるをわすれぬむめのはなたれなほざりのいろかとかせん（四九「梅」）

b　みちのべの柳のいとのくりかへしあはれむかしのはるをこひつつ（五六「柳」）

c　あし引の山はひとつのみちをだにこなたかなたとなす人のうさ（六〇二「山」）

このa～cの三首は、阿仏尼と同様①～③の道真の和歌を引いている。この和歌以外にも道真の和歌を引いているものがある。

d　あまのがはみちもやどりもあきごとにかはらじものをほしあひのそら（二五九「七夕」）

e　わび人のそではなみだといひおきてくさばにまさるあきのしら露（三二二「露」）

このd、eの和歌では、それぞれ、

④　あまつほし道もやどりも有りながらそらにうきてもおもほゆるかな（『拾遺集』四七九）

⑤　草ばにはたまと見えつつわび人の袖の涙の秋のしらつゆ（『新古今集』四六二）

という道真の和歌を引いている。以上のように『為家七社百首』の北野社百首ではa～eの五首が道真の和歌を本歌としているのである。また、宗尊親王『中書王御詠』には、

そのころ同社（北野）にたてまつりし十首歌に

A　神だにもいざとみちびけあし引のこなたかなたにすてらるる身を（三三九）

B　あはれしれにしふく風に露そへてわがはつしほのそでのくれなゐ（三四〇）

C　さえのこるいづれのぬまにおりたちてひかりなき身のそでぬらすらん（三四一）

D　やくしほも立つしら浪もいさしらず我のみからきよにまよひつつ（三四二）

とあり、北野に奉納された十首のうち四首が載せられている。Aでは先に挙げた③の和歌を引いており、B～Dの和歌では、それぞれ、

⑥　松のいろはにしふくかぜやそめつらんうみのみどりをはつしほにして（『続古今集』六九〇）

⑦　天の原あかねさしいづる光にはいづれの沼かさえのこるべき（『新古今集』一六九一「日」）

⑧　ながれ木とたつしらなみとやくしほといづれかからきわたつ

みのそこ（『新古今集』一七〇一「波」）

という道真の和歌を引いている。

以上のように、阿仏尼の荏柄宮百首だけではなく『為家七社百首』や『中書王御詠』でも、道真の和歌を本歌としているのである。よって、荏柄宮百首の113・114・192では、阿仏尼は先行和歌に倣って、菅原道真の和歌を引いていると思われる。ここでも道真、つまり天神を意識して詠んだものといえるのである。

道真の和歌を引くということは、歌人の教養として『古今和歌集』や『新古今和歌集』などの勅撰集歌を詠み入れるという、単なる本歌取りとは、意味合いが違っていたのではないだろうか。天神が道真である以上、彼が詠んだ歌にはある種「力」のようなものがあると考えていたのではなかろうか。そのため、彼の和歌を詠み入れたのではないだろうか。そして、その天神の力を加えることよって、その利益を求めたのではないかと思われる。そこには、道真の和歌を引くことによって天神は少しでも感応してくれるであろうという心理が働いたものではないかと思われるのである。

四、表現上の特色

先行論文でも述べられていることで重なるところもあるとは思われるが、荏柄宮百首における信仰ということを考える上で、この百首での主張を確認することが必要と思われるので、今一度見ていくことにする。

168　ふみとめし昔のあとを忍ぶとてひがたのちどりなく〳〵ぞふる（「千鳥」）

浜に残された「足跡」に「筆跡」つまり「為家の譲状」のことを掛けていると思われる。それに記し置かれた内容とは違う現実を嘆かずにいられないようである。

『十六夜日記』長歌の最後の部分には、

……同じ播磨の　堺とて　一つ流を　汲みしかば　野中の清水　澱むとも　もとの心に　まかせつつ　滞りなき　水茎の跡さへあらば　いとどまた　鶴が岡辺の　朝日かげ　八千代の光　さしそへて　明らけき世の　なほも栄えむ

とあり、「為家の譲状（滞りなき水茎の跡）がある上に鶴岡八幡宮の加護により、汚れのない世が栄えるであろう」という意味だと思われる。つまり、阿仏尼は為家の譲状があるからこそ、この訴訟には勝訴するのだと考えていたと思われるのである。したがって、

194　あづまのやいく野ゝつゆも分つらんすぐなりときく道を頼みて（「野」）

とあるように、自分が通る道は「すぐなり」つまりまっすぐな正しい道であると思っていたのであろう。

190 なげくらんうづもれはてばこの道のみよまでつゞく苔の下にも（「苔」）

傍線部分「この道」とは「和歌の道」のことであり、「みよ」とは俊成・定家・為家の三代を指していると思われる。阿仏尼にとって「道」とは、御子左家における「和歌の道」であり、それは為家から伝えられた正しいものであるという主張がうかがえる。そこには「昔の跡」として意識していた「為家の譲状」の存在が、阿仏尼の自負につながっていると思われるのである。為家が譲状で認めた正当な道であるにもかかわらず、それが埋もれてしまったら俊成・定家・為家たちは嘆くであろうと、二条家への非難を込めて詠まれたものと思われるのである。

191 いかにせんわかのうらぢのよるの鶴こはよにしらずかなしかりけり（「鶴」）

「夜の鶴」は、『和漢朗詠集』四六三にも載せられている白居易の「五絃弾」という詩の一節「夜鶴憶レ子籠中鳴（よるのつるこをおもてこのうちになく）」によるもので、鶴が雛を守って夜も寝ないということに、子に対する親の愛情の深さを例えて使われる語である。また『詞花和歌集』巻第九　雑上　三四〇、

帥前内大臣あかしに侍りける時、こひかなしみてやまひになりてよめる　高内侍

・よるのつるみやこのうちにはなたれてこをこひつつもなきあかすかな

という和歌以降、多く詠まれることになった歌語である。191の傍線部分にあるように、「わかのうらぢ」つまり歌道家で育った愛しい我が子といい、手放しでわが子を思う様子がうかがえる。ここでは「わかのうらぢのよるの鶴」と表現することによって、我が子が歌道家を継ぐ者であると主張しているように思われるのである。

以上あげた歌からも、この訴訟の旅は、御子左家三代、その歌道を継ぐ愛しい我が子のためであり、自分たちの方が正当であるのだという主張がうかがえるのである。したがって、訴訟はすぐに決着すると阿仏尼は思っていたようであるが、しかし、

198 程もなく夏のゝ草と成にけり霜をむすびしたびの枕も（「旅」）

199 かりそめと思ひしかども別路のほどはるかなる月日へにけり（「別」）

とあり、「かりそめ」ではなく意外に月日が過ぎてしまい、十月の「霜をむすびしたび」であったものが、いつしか五月（序文）の「夏のゝ草と成」ってしまったと、時の流れを嘆いている。その間は、

119 旅の空ひとりかなしき夕暮の涙にうきてかへるかり金（「帰雁」）

120 しる人もあらばや誰をよぶこ鳥よぶとてもまたこたへしもせ

じ（「喚子鳥」）

125 いかばかりなげくとかしるくちなしに物こそいはね山ぶきの花（「款冬」）

175 ともとてはたゞ埋火の影ばかり夜をさむしろに独おきゐて（「炉火」）

とあるように、「ひとり」孤独であり、呼んでも返事がないなどと嘆いている。また125の和歌は『後拾遺和歌抄』第十一・恋一・六三〇、

ひとのこほりをつゝみて、みにしみてなどいひてはべりければ　馬内侍

・あふことのとどこほるまはいかばかりみにさへしみてなげくとかしる

を引いており、家族や友人に会うことが出来ないでいるという孤独感に呵まれていたようである。この他にも、

135 さみだれのやへくもはれぬ谷かげはおもふ心もうちしめりつゝ（「五月雨」）

152 物思ふ草の枕の秋なればなみだにつゆをかさねてぞをく（「露」）

163 ふりはつる身をわび人のたもとより時雨もつゞく冬の夕ぐれ（「時雨」）

170 とことはになみだの川をまくらにてうきたるかものねこそなかるれ（「水鳥」）

197 かぢをたえよるべもなみにしほれつゝ我やうきよをわたる舟人（「海路」）

202 なみだ川からくれなゐに行水も忍ぶ昔にかへる色かは（「懐旧」）

205 さま〴〵に思ひつゞくるもしほぐさなをかきあへぬわがなみだ哉（「述懐」）

というように憂き世に対して涙し、辛い状態を訴えている和歌も多くある。しかし、

174 年をへてもえこそまされわが身よに猶すみがまのたえぬ思ひは（「炭竈」）

とあり、年月が経ち、いっそう訴訟への執念が強くなったようでもある。

以上の和歌のように、俊成・定家・為家と三代続いた御子左家は阿仏尼の息子為相が継ぐ者であり、それは「昔の跡」つまり為家譲状が示す通りであり、よって阿仏尼らは正当であるのだと考えていると思われる。しかし現状では、なかなか訴訟は決着せず、孤独や憂き世などに涙し嘆いているのだと訴えているのである。

117 吹はらふ風をこそまて春雨にぬれぎぬほさで雲かゝれども（「春雨」）

122 なにとわれかゝるうき世にすみれ草つみえぬばかり物思ふら

む（「蓬莱」）

124 いつはりをかけてしらなんはなにさく藤をも浪と人はいふなり（「藤」）

153 ねをぞなくなき名たちそふ秋霧の晴もやすると空にむかひて（「霧」）

169 なきことをいはれのいけの薄ごほりきゝとく人のあるよなりせば（「氷」）

193 あらはれよみないつはりの名とり川人しづむなるせゞの埋木（「河」）

ここで挙げた和歌は、「ぬれぎぬ」「いつはり」「なき名」などの歌語を使用することによって、無実の罪を自分は着せられているのだということを様々に表現し、主張しているのである。『五百首』のうち荏柄宮百首以外の四社で、こういった表現を使用していると思われるものは、今熊野百首「旅」に、

98 えぞしらぬならはぬ旅の草枕あらしのとがにいまいく夜とも

という、「嵐」と「あらじ」とが掛けられている一例のみである。したがって、これら「無実」だという表現の多用は荏柄宮百首の特徴といえるであろう。阿仏尼には、何度も記された「為家の譲状」があるにもかかわらず、細川庄は譲られることなく、訴訟が起きてしまったという辛い状態を「雲かゝる」「うき世にすみ」「秋霧」「薄ごほり」「人しづむなる瀬々の埋木」などと表現し、「吹きはらう風」「晴」「きゝとく人」「あらはれ」などのように救い出してくれる対象つまり神や判決を下す幕府の人間を例えており、それを願い求めている。いずれも、疑いを掛けられた辛い状態を訴え、そこから救い出してくれることを願っている和歌である。

　無実の罪によって太宰府に追われ配所で没したという菅原道真つまり天神は、同じような境遇に陥ってしまった自分の気持ちも理解してくれ、あらぬ疑いを払ってくれるのではないかと阿仏尼は信じていたのであろう。そのため、このような「身に覚えのない罪を得ている」といった表現が、荏柄天神社への奉納百首に偏ったのではないかと思われるのである。169や193の和歌では「いはれのいけ（大和）」「名とり川（陸奥）」という、天神とは無関係である歌枕が使用されているのではあるが、「言はれ」「名を取る」という掛詞として使われており、自身の置かれた状況（無実の罪をかけられている状態）を表現するために、これらの歌枕は用いられているのである。

　したがって、無実の罪を着せられたことのある菅原道真を祀っている北野天神ならきっと自身の無実を明らかにしてくれるものと信じ、その神を勧進した荏柄宮だからこそ、先に挙げた序文に「偽りの多い世の中であるのであるからこそ敢えて天神社へ百首を今一度奉納するのだ」と述べたのである。

他者による北野社へ詠んだ和歌に、『拾遺風体和歌集』四九一、

鳥羽院御時、無実を女にいひつけられて北野にこもりてよめる

仁俊法師

・あはれとは神がみならばおもふらん人こそ人をなきになすとも

また、『臨永和歌集』三〇七に、

北野の社にて講ずべき歌とて人のよませ侍りけるに、神祇

前大納言実教卿

・いつはりのなき名あらはす神がきに雪とは花のなどまがふらん

とあるように、天神は、身に覚えのないことを言われて罪を着せられてしまった者たちが頼るべき神であったのである。

平安時代後期頃から鎌倉時代にかけて、『大鏡』『古今著聞集』『北野縁起』『扶桑略記』『十訓抄』『源平盛衰記』などにあるように、北野天神（道真）に関する説話が多く語られるようになっていった。また、勅撰集や私家集でも、例えば、『顕輔集』三九（『続古今集』七四三）、

しらぬ事を人のまうせるによりて、白河院の御かしこまりなるころ、唐鏡の一尺ばかりなるを北野にたてまつるとてかきつけし

・身をつみててらしをさめよますかがみたがいつはりもくもりあらすな

その事のあらはれにしこそ世のするともなくあはれなりしか

また、藤原定家『拾遺愚草』二八九九、

ことわり思ひしことを北野にいのり申すとて

・ちはやぶる神の北野に跡たれて後さへかかる物や思はむ

そのことわり、しるしあらたになん侍りける

とあるように、左注にその霊験が顕れたということが示され、天神信仰が盛んに行われるようになっていった当時の信仰の有りようをうかがい知ることができるのである。

阿仏尼の時代でも、天神信仰が盛んに行われていた時代であった。おそらく阿仏尼も一連の説話は知っていたと思われる。また、長沼賢海氏の「天満天神の信仰の変遷」(注8)に、

平安時代には、菅神はもっぱら怨恨の神、風雨水火の支配神であって、罪悪の罰すべきものを懲らすという荒神の意味に信ぜられた。しかして鎌倉時代の中頃より、その終りにかけて、冤罪を救う神として利生を示し、ついではいかなる所願でも、一心一向に菅神を祈念する者には、必ず成就せしむるという慈悲救済の神となり、転じては後生すらも助くる絶

対慈悲の神となった。いわば菅神は祈禱の対照（ママ）から信仰の対照へと変化した。

とある。平安時代以降、天神信仰は様々に変容していった。鎌倉時代に入ると、専ら冤罪に苦しむ者を救済するという信仰がもてはやされるようになっていく。そうした時代背景において、阿仏尼の北野天神への信仰も、以上見てきたように「無実の罪を着せられた者が身の潔白を晴らす」というところにあったのである。だからこそ、阿仏尼はこの荏柄宮へ奉納する百首に敢えて「ぬれぎぬ」「いつはり」「なき名」などのような「無実の罪」という表現を多用することで、自分が天神と同じような境遇で苦しんでいるのだと訴えていたのである。

阿仏尼が置かれていた状況は、『源承和歌口伝』における表現にもあるように、二条家の風当たりがかなり強かったと思われる。そのため、有ることないことを色々と言われたに違いない。為家の譲状がある以上、自分達側が正当であり、訴訟が起きるということはあり得ないものと思っていたであろう阿仏尼にとっては、そういった状況は「ぬれぎぬ」以外のなにものでもないと思っていたに違いない。そして、阿仏尼は、序文にあるように「さしもいつはりもおほきよなればとおも」い、冤罪から救ってくれるという天神に訴えたのである。そこで、

107 あきらけき春まちえたる空なれば人の心もいかゞくもらん（「立春」）

131 しづむ身をたれひくべしとたのみてかうきぬのあやめしたに待らん（「菖蒲」）

192 神よはやまことあらはせ足曳のこなたかなたの道をたゞして（「山」）

194 あづまのやいく野ゝつゆも分つらんすぐなりときく道を頼みて（「野」）

195 頼むぞよ道ゆくことも神こそはすゑをとをさめあふ坂の関（「関」）

196 あはれとは神やみかはの八はしも我もくもでになげき渡るを（「橋」）

以上の和歌のように、「なき事によりてかく罪せられたまふ（注9）」道真＝天神だからこそ、御子左家三代とくに為家（譲状）の示す通りに行動し「すぐなりときく道」つまり正当であるということを頼りにやってきた自分のために、乱れた「道をたゞし」、真実を明らかにしてくれるものと信じていたのである。冤罪により配流させられることになった道真と同じような境遇で「しづむ身」だと「なげき渡る」自分を、天神は「あはれと」見て、その辛い状況から引き出してくれるものと信じて願ったのである。

五、最後に

荏柄宮百首では、社に関係する歌枕は「ひとよ松いまもきたの〵」という一例しか見出されず、『五百首』の他の百首や『為家七社百首』の北野社百首と比べてもかなり少ない。しかし、道真の和歌を引いていると思われる和歌が数例あり、天神を意識していたことがわかる。定数歌を寺社へ奉納する場合、奉納先に関係のある歌枕を詠み入れるという制約があったが、北野社・天神社への奉納和歌と限ると、その上、道真（＝天神）の和歌を詠み入れるという制約もあったようである。そういった制約（先例）に従って、阿仏尼は荏柄宮百首を詠んだのである。

平安時代前期においては怨恨の神として御霊信仰の対象であった天神は、道真という歴史上の人格者ということもあって平安末期以降には文学・書道・学問の神としても信仰されていた。石田吉貞氏は『藤原定家の研究』（文雅堂書店　一九五七年）において、定家の北野社に対する信仰は全く歌道に関するものであり、天神を「文学の神」として信仰していたと指摘されている。阿仏尼も、歌道家存続のための勝訴祈願という性格の百首を天神へ奉納したということを考えると、天神＝文学の神として信仰していたとも考えられる。

また一方で、天神信仰は罪悪の罪を犯すものを懲らしめるという

荒神としての信仰も加わり、鎌倉時代中期頃より冤罪を救う神として信仰されていたのであった。こういった天神信仰の変遷の中、阿仏尼は雪罪の神、正直を守る神として天神を信仰していたということが、和歌の表現からうかがい知ることができる。つまり、自身の置かれている状況を道真の境遇に重ね合わせて「ぬれぎぬ」「いつはり」など無実の罪であると表現している歌語が、『五百首』の他の四社と比べ荏柄宮百首では多用されているという点である。

冤罪から救い出してくれるという天神信仰は阿仏尼の時代にはごく当たり前に行われていたものであり、阿仏尼の置かれた立場に合致した信仰であったのである。したがって、それは、何が何でも頼らなければならない神として、一度ならず二度までも天神に百首を奉納することにしたのだと荏柄宮百首の序文で強調するところであったのである。

注

（1）「為家譲状」（冷泉家時雨亭叢書『冷泉家古文書』朝日新聞社　一九九三年）による。

（2）『安嘉門院四条五百首』の伝本には、松平文庫『安嘉門院(ママ)五百首』（江戸初期写）・薬師寺蔵『阿仏尼詠五百首』（江戸中後期写）・冷泉家時雨亭文庫『阿仏五百首和歌』（室町中期写／薬師寺本に近い）の三本、及び古筆切（「伝為家筆安嘉門

院四条五百首切」の一葉）が確認できる。この古筆切は『古筆手鑑大成』第十六巻の金沢市立中村記念美術館蔵「古筆手鑑」に所収されている。鎌倉時代末頃の書写で、新賀茂社百首の「若菜」（211）下句から「柳」（214）の箇所であり、歌題を省略している。書写年次・歌題の省略や作品の性格上、阿仏尼に近い人物による書写と思われる。冷泉家本の出現により室町中期頃には走湯山・箱根宮・三島社・若宮・稲荷社からなる前半の五百首は欠落していたと考えられるが、この断簡は、おそらく、千首和歌から成っていたものであろうから、ツレの確認がされれば当時の姿を見ることができるだろう。ツレの存在が待たれるところではあるが、しかしながら、この断簡はかなり破損が激しく、新たなツレの存在の確認は皆無に近いかもしれない。

　本稿では島原図書館松平文庫本（『松平文庫影印叢書　第十六巻　定数歌・歌合編』及び『校註阿仏尼全集増補版』（簗瀬一雄編　風間書房　一九八一年））を採用している。また『五百首』和歌の算用数字は新編国歌大観番号である。

（3）松平文庫本の冒頭には残闕六首と跋文が残っており、島津忠夫氏は「安嘉門院四条五百首と十六夜日記」（『国語国文』31―1　一九六二年／のち『和歌史の研究―和歌編―』角川書店　一九九七年）において、『夫木和歌抄』に走湯山・箱根宮・三島社・若宮・稲荷社に奉納した弘安二、三年にかけて詠まれた阿仏尼の百首から取られた和歌があることに注目し、全体は「十社に奉納した千首」と推定されている。田辺麻友美氏は「『安嘉門院四条五百首』攷――『十六夜日記』との関わりを中心に――」（『和歌文学研究』75　一九九七年一二月）で、残欠六首とその跋文は稲荷社百首であると推定されている。

（4）荻原龍夫校注『北野天神縁起』（本思想大系20『神社縁起』岩波書店　一九七五年）による。

（5）『安嘉門院四条五百首』以外の和歌で、特に断りなくあげているものは『新編国歌大観』による。

（6）荏柄宮百首の歌枕（地名）は、131「うきぬ（浮沼、石見または大和か）」164「くろかみ山（大和）」166「ふじのね／かひのしらね」169「いはれのいけ（大和）」184「あさま（信濃）」185「おもひがは（筑前）」188「ひとよ松／きたの」191「わかのうらぢ（紀伊）」193「名とり川（陸奥）」194「あづまの」195「あふ坂の関（近江）」196「八はし（三河）」の十三例である。

（7）為家の北野社百首における、北野に関係のある歌枕は、七「松も一夜」一四「ふなをか／きたの松」三五「みこしをか」七〇「きたのまつ」八四「きたののべ」一六八

「きたのもり」二五二「ひとよ」三七八「ひと夜／きたのもり」四二〇「みやこの北ののべ」四六九「きたののはらのみこしをか」五七四「きたのの一夜まつ」六一六「きたのの神」という以上の例が見出せる。

(8)村山修一編『民衆宗教史叢書　第四巻　天神信仰』(雄山閣出版　一九八三年八月)に所収。

(9)『大鏡』(佐藤謙三校注　角川書店　一九六九年)の「左大臣時平」による。

【参考文献】

・遠藤泰助「中世前期における天神信仰」(『天満天神信仰の教育史的研究』講談社　一九六六年一一月)

・長沼賢海「天満天神の信仰の変遷」(村山修一編『民衆宗教史叢書　第四巻　天神信仰』雄山閣出版　一九八三年八月)

・目崎徳衛「道真和歌の虚実」(『国文学』37-12　一九九二年十月)

・真壁俊信『天神信仰史の研究』(続群書類従完成会　一九九四年三月)

(ふくどめ　たまみ／本学大学院生)